

過渡期に關する若干の社會學的考察

——特に社會の崩壞過程を中心として——

池 田 義 祐

一

我々が今日、現實に接してゐる社會現象の多くは直接もしくは間接に現今の社會狀態に基く過渡期的現象として一般に認識せられ、把握せられ、或は處置されてゐるやうである。

政治、法律、經濟、教育、道德或は藝術等々のあらゆる社會領域に於いて頻繁に見られる混沌の狀態、未解決の問題、暫定的處理對策——これら一連の社會現象はひとしく過渡期的現象と云ふレッテルの下にその存在を認容されてゐるのである。如何に多くの所謂、過渡期的現象が今や我々をとりまき、我々の周邊に渦巻いてゐるかは、人がこれらの現象に就いてその一々を明確に意識

し、深刻に反省すると否にかかわらず、少くとも現實を直視するかぎりもはや明らかに社會的事實 (faits sociaux) として認めざるを得ないところであらう。

我々は今、一應このやうな過渡期的現象と稱せられるものを一括して過渡期に於いて發生し、存在する人間關係的なる事象、即ち社會事象と規定して、その基礎たり底礎たる過渡期そのものに關し以下社會學的見地より若干の一般的考察を試みる。

過渡期 (transition period or stage, Übergangsweise) とは社會が或る特定の時代から他の特定の時代へと變遷しつつある期間、即ち社會變動 (social change, soziale Veränderung) の全時期を云ひ、時間的繼起に於いて先行する古き社會が後續する新しき社會へ移行す

る際の時間的展開過程を云ふのである。従つて如何なる時期を過渡期と見做すかは如何なる期間を時代と見做すかに依つて決定されるのであるが、こゝに時代と云ふのは人間をして眞に社會的存在たらしめるところの一般的、共通的な行爲様式(*manière de se conduire*)——即ち廣義に於ける文化^⑨がそのあらゆる領域に互つて相共に個人を支配し、逆に云ふならば個人がかかる行爲様式に配與(*teilhaben*)し、相共に各領域が統合(*integration*)の状態に於いて共屬する一定の期間を意味するのである。

凡そ人間の存在は何らかの意味に於いて必ず行爲に依つて存在たりするのである。即ち何らかの行爲に依つて規定せられざる人間の存在はなく、如何なる行爲もなきところには我々は人間の存在を到底考へ得られないであらう。然も人間の存在が只單なる本能的動物的存在ではなくして、或ひはそれ以上に眞に人間(*human being*)としての存在であるためには、彼の存在を規定する行爲が彼の屬する社會に共通なる行爲の様式に配與してゐなければならぬことも又明らかである。例へば人間は言

語を有する動物であると云はれてゐるが、即ち言語を有すると云ふ點に於いて眞に人間的存在の一面を形成してゐるのであるが、このやうな言語は決して特定の個人が獨占してゐるものではなくして、社會に共通なる發聲に關する一の行爲様式、即ち廣義に於ける文化の一領域に外ならず、人間が言語を有すると云ふことは彼が屬する社會の共通なる行爲様式の一としての言語に基き、それに依つて自己の意志や感情等を他人に傳達し、又は他人からそれらのものを受容し得てゐると云ふ點に歸するのである。

さてこのやうな行爲様式は衣・食・住の如き日常生活から其の他あらゆる人間生活の各方面に互つて、それ／＼に存在してゐるのであるが、これらの行爲様式は通常相共に一定の期間、一定の地域的範圍に共屬し、相互に極めて緊密に關係し合ひ、依存し合つてゐるのである。即ち諸々の行爲様式は相互に合理的に調和し、順應し、適合し、もしくは能率的に關係し合ひ、又そのやうにならんとする傾向を有してゐるのである。かかる相互依存、相互規定の關係は文化の積分、統合と呼ばれ、例

へば家の建て方、屋根の葺き方、庭園の造り方、室内の装飾の仕方から經濟生活、宗教生活等々の様態に至るまで相互に密接に結合して一の全體としての廣義の文化を形成してゐるのである。此の意味に於いて文化は完結的、完成的であり自足的である。

例へば和服、下駄、疊等に依る生活形式と生花、茶ノ湯、和樂、舞踊等の藝術の領域に於ける様式等が如何に相互に密接に關連して一の完結的な文化を形成してゐたかは我々が少しく過去を省みるならば直ちに領解しうるところであらう。高層ビルディングの一室で洋装の女子が椅子によつて琴を彈する(此の場合、彈すると云ふ言葉すらも不調和的である)と云ふことが到底和樂の行爲様式として成立し得ないまでに琴と云ふ樂器と、或は琴による音樂と周圍とが一致せず、不調和であるのは、逆に琴が如何に和服や障子、疊其の他の生活様式と緊密に結び付いてゐるかを物語り、このやうな諸々の行爲様式が全體として一のまとまり、即ち統合の狀態にあり、他の行爲様式を以つて代替し得ないと云ふ完結性を示してゐるのである。

このやうに諸々の行爲様式、即ち文化の各領域が相互に依存し、共屬し合つてゐる狀態を時間的ひろがりにおいて把握した場合これを時代と云ひ、他面、これらのものの空間的、地域的範圍に於いて把握せられたるものを我々は社會と見なしてゐるのである。従つて過渡期とは或る一定の完結的な人間生活の様態、即ち或る一定の社會が、他の同様な意味に於ける特定の生活形態、即ち特定の社會へと全面的に變轉するまでの過程を意味するのである。

我々は以下、かかる意味に於ける過渡期を考察するにあつて、先ず變轉の主體たる社會そのものに就いて更に今少しく詳細に検討し、これを或る程度まで明確に規定し、次いで社會變動の規定因素の若干と變動過程の形態の一半たる社會崩壞の過程を論述しよう。

二

さきに我々は諸々の行爲様式が相互に依存し、共屬し合つてゐる空間的、地域的範圍を一應、社會と規定したのであるが、このやうな意味の社會とは一體如何なるも

のであらうか。

通常用ひられてゐる社會なる言葉は臼井教授も指摘されてゐる如く^⑦極めて多義的であるが、少しくこれを検討してみると概ね次の如き三種のものに大別されうるやうである。

其の一は Rousseau や Hegel, L. v. Stein 等の所謂市民社會(Bürgerliche Gesellschaft, Société civile)を以つて社會と見做すものであつて、主として西歐近世に發達し來つた社會の特殊な一形態をさしてゐるのである。それは個としての自我に目覺めた、従つて明確なる個人意識を有する成員に依つて構成されてゐるが如き社會であり、このやうな社會に至つて初めて個人に對する社會が判然と意識され、確認されるのである。かかる意味に於いて社會は實に近世に於ける自我の發見をまつて其の存在が確認せられたのであるが、このやうに社會の確認を可能ならしめたと云ふかぎりに於いて近世市民社會こそ唯一の社會であり、従つて社會とはかくの如き市民社會に外ならぬとされてゐるのである。

社會の存在そのものと社會への意識との混同に依る、

かうした時間的にも又地域的にも特殊な市民社會が、我々が今過渡期を論ずるにあたつて問題としてゐるやうな一般的意味に於ける社會でないことは云ふまでもなく明らかであらう。

次に特殊な社會集團や社會層を社會と見做す場合がある。前者は教團とか、學校とか、或は俱樂部等々の如きものであつて、例へば教團の如き社會にも革新の烽火があがつたとか、或は某俱樂部の如き社會に出入するとはけしからぬと云ふが如き場合の所謂「社會」である。後者は階級とか身分等の如きものであつて、特定の社會集團を意味するのではないけれども漠然として例へば上流社會とか、下流社會とか或は軍人の社會とか僧侶の社會とか云ふが如き場合である。

このやうな社會集團もしくは社會層としての社會は所謂部分社會(Teilgruppe)、派生社會(association)であるか^⑧、或はかくの如き社會集團を未だ形成するに至らない人間結合の一形式としての共合體^⑨(Potential group, or Collective behavior)かであるが、然しながらその何れにせよとにかくそれのみでは現實にも又理論的にも

存立の不可能なる、即ち其の基礎に何らかの全體を前提としなければならぬ部分的存在であることは特に論述するまでもなく明らかであらう。

かくの如き特殊な意味を有する部分的社會が今我々が當面の問題としてゐる社會と如何なる關係にあるかは、次の第三のものが考究される際に自ら判明するところであるが、要約すれば前者は社會變動の主體たる後者の部分として存立してゐるものである。

従つて此の場合に於ける個々の特定の所謂「社會」が直接それのみでは、過渡期の考察にあたつて對象となる社會一般でないことは容易に推知しえられるであらう。

最後に第三のものは社會通念とか社會狀態とか社會問題或は社會福祉等々に於ける社會自體であつて、此の場合の社會は前二者よりもはるかに一般的で、包括的な意味を有してゐる。例へば社會狀態は決して近世市民社會にのみ該當する狀態ではなく、古代社會にも中世社會にも或ひは又東洋社會にも、更には未開社會にも認められるところであり、同時にそれは本來個々の特定の社會集團や社會層に限定されるものではなくして、これらのも

のを包括した全體的基盤に於いて論ぜられるものである。政黨と云ふ特定の社會集團に於ける常識が今日社會通念に依つて批判されるべきであると云ふが如きは、政黨を其の一部分とする、換言すれば政黨が依つて以つて存立し得てゐる基盤としての全體の立場から批判されるべきであると云ふ意味が含まれてゐるのである。

このやうに時間的にも空間的にも普遍的な、そして又同時に全體的、包括的な社會を我々は一般に「社會」そのもの（それは社會の本質としての *Simmel* の所謂「純社會」^① *wirklich nur Gesellschaft* と云ふが如き意味ではない）と見做し、且つ前述の部分的社會（*partial society*）に對して全體社會（*Community*）^②或は綜合社會（*Gesamtgesellschaft, Society in its totality*）と呼んでゐるのであるが、これが如何なるものであるかを極めて簡単に述べるならば次の如くである。

社會とは主要なる生活領域に於ける接觸交渉が其の中で自足的に行はれ得て、従つて主要なる行爲様式の支配が其の内部に行き互つてゐる空間的範圍に於ける、この様式に従つて行爲する人間の集團である。

即ちそれは先づ第一に一の人間集團 (Human group) であり、その集團を構成してゐる人間即ち成員が一定の地域内に居住してゐると云ふ意味に於いて一の空間的範圍を有し、かかる範圍内に於いて接觸交渉をなすと云ふかぎりに於いて共同生活 (common life) をなしてゐるのである。この接觸交渉の様式として、同時に共同生活の結果として其の集團の内に共通にして外に對して特異なる一連の行爲様式、乃至共同特徴 (廣義に於ける文化) が存在し、且つこのやうな様式に従つて行爲する結果其の成員が集團への共屬の意識及び意欲を即自的 (ansch.) にか、對自的 (für sich) にか有してゐるが如き人間の集團である。

ここに主要なる生活領域と云ふのは經濟、法律、宗教、藝術、政治、道德、教育等々であつて前述の特定の社會集團乃至社會層は概ねこれらの個々の領域、或は二、三の領域を其の基盤として成立してゐるが如き人間結合の形態である。

猶、自足的な空間的範圍と云ふのは次の如き意味である。凡そ接觸交渉は何らかの意味に於いて人間の欲望、

即ち人間生活の要求を充たすために行はれるのである。この場合、重要な接觸交渉の及ぶ範圍、即ち重要な行爲様式の支配する範圍は人間生活の重要な要求が充たされうる範圍である。従つて人間生活の重要な要求がすべて充たされうるやうな一定の範域以外にまで人はその接觸交渉を及ぼす必要なく、かかる重要な要求が其の内部に於いて充たされうるやうな範圍は社會生活の自足的範圍と云ひ得られ、この意味に於いて社會は自足性が具つた空間的範圍と云ひ得るのである。

我々はさきに一應、社會を一定の完結的な人間生活の様態と規定したのであるが、それは實に今の「社會」そのもの、即ち自足性を具へた一定の空間的範圍としての社會、所謂全體社會に外ならないのである。

然るにかくの如き全體社會は前述の如く、内に共通にして外に對して特異なる行爲様式、即ち共同特徴を有してゐるのであるが、此の點に於いて現實には共通—特異の程度が種々なる差異を有して居り、その程度の差異に従つて例へば世界社會、歐洲社會、西歐社會、或は國家、民族、地方、村落等々が主として成層の乃至階層的關係

に於いて區別せられるのである。

さて我々が今、社會變動の主體として考へてゐる社會は云ふまでもなく全體社會であるが、これを現實の面から把握するならば内に共通にして外に對して特異であると言ふ點に於いて、その程度の差の最も大なる階層に於ける低次の社會を意味するのである。即ち言語、風俗、慣習等々に於いて格段の特異性を有する階層に於ける全體社會の現實の空間的範圍を我々は社會變動の主體としての社會と見做してゐるのである。何となればかくの如き社會に於いて社會の自足性、完結性乃至各文化領域の統合狀態が最も高度に實現せられ、従つてそこに最も高度なる社會の實在性乃至社會性が見出され得るからである。

我々が當面の問題としてゐる社會がかかる意味に於いて具體的には多くの場合、民族乃至國家であることは一般に認められるところであらう。

此の點に關しては今少しく詳細に論すべきであるが、之を他日の機會にゆづつて次の論點に進む。

三

以上我々は極めて簡單にはあるが、社會學の見地よりする過渡期の一般的規定と之と關連して問題となる社會に就いての考察とをなしたのであるが、次にかくの如き過渡期を發生せしめる動因とも云ふべきもの、換言すれば社會變動の規定因素に關して、その若干を考へてみよう。

或る一定の社會を他の特定の社會へと時間的に變移せしめる主要なる根本的動因が如何なるものであるかに就いては、從來種々なる立場より多様な解釋がなされてゐる。今それらの中で特に科學的立場をとる二、三の主要なるものをあげれば人口の増加、生産力の發展、發明、社會の接觸等がある。

社會變動の根本的要因を人口の増加と云ふ一の人口現象なりとして、特にこれを重要視してゐるものは社會學者に於いても從來其の數決して少しとしない^⑩。然し乍ら我々は此の立場を全面的に肯定しないものである。何となれば前述せる如く社會の變動は根本的に一定の社會を

社會たらしめてゐる諸々の既存の行爲様式が全面的に崩壊することを意味するのであるが、このかぎりについて單なる一定地域内に於ける人口の増加は増加した人口が依然としてその一定の地域に封鎖されてゐるならば必ずしも行爲様式の崩壊を伴はず、むしろ反對に行爲様式は傳統的となり、多數の人々に依つて愈々強固に墨守されるであらう。

勿論、一定の行爲様式に従ふ個人の増加は同時により多様な個性の存在を可能とし、一定の行爲様式の個人への對應關係、逆に云ふならばより多數の個人の行爲様式への配與關係はより複雑となるであらう。このやうな過程を通して從來の行爲様式が漸次、多少の變容、修正を加へられてゆくことは疑ふべくもないところである。

然し乍らかゝる漸進的な變容と全面的、同時的な且つ根本的な崩壊とは嚴に區別されるべきであり、即ち前者は一定の行爲様式が基本的には肯定されてゐるに反し、後者は根本的に否定されることを原則とするのである。

次に人口の増加が一定の地域を超えて進行する場合、換言すれば増加する人口を從來の社會がもはやあらゆる

點に於いて包容し得ないまでに立ち至つて、所謂餘剰人口が他の新たな地域へと移動し、分散してゆく場合を考へてみる。此の際、新たな地域に對して從來の行爲様式が全く適應しないならば彼等は滅亡するか、更に他の地域へ移動する外はないであらう。従つて移動し、分散した餘剰人口が依つて以つて社會を形成するに至る新たな地域は從來の行爲様式が全面的に否定されるが如き自然環境ではなく、根本的にはこれが肯定されうるやうな地域である。かく考へて來ると事情はまさに原理的には前の場合と甚だしき相違なく、そこに直ちに社會の變動が突發するとは到底考へられないのである。

例へば極めて概略的に考へるならば歐洲人のアメリカ大陸移住は全體としてのアメリカ社會にも、又同様に歐洲社會に對しても、其の後の長期間に亙る修正、變容は相互に認められるにせよ、直ちに從來の行爲様式（其の一である言語をとつて考へてみても判るやうに）の全面的崩壊を招來してはならない。

以上に依つて人口の増加それ自身が直接、社會變動の

根本要因と考へられない點を若干指摘したのであるが、更に此のことは次の如き逆の場合を考へてみることに依つても一應承認されうであらう。即ち人口増加の見られない社會——それは人爲的な抑制に依る場合と自然的な現象として現はれる場合とがあるが——にも社會の變動は起り得るし、又現實にも生じてゐるのである。此の點に關しては後に述べる社會の接觸に於いて多少とも明らかにする。

かくして若し人口の増加を以つて社會變動の根本的要因と見做すならば、かかる根本的要因の存しない所にも猶且つ社會變動が認められることとなり、根本的要因が眞に根本的要因となり得ない矛盾におち入るであらう。

次に社會變動の根本的要因としてあげられてゐる生産力の發展に就いて考察する。^⑩

社會の變動を分析するとそこに生産力の急激なる發展が見出されることは一般に否定することの出来ない事實であらう。我々は其の最も著るしき例の一を近世に於ける西歐社會の變動に見ることが出来る。諸々の機械に依る生産力の急激なる發展が手工業的な封建社會から資本

主義社會への變遷の全過程に於いて如何に重大なる役割を果したかはこゝに改めて云ふまでもなからう。

然し乍ら生産力の急激なる發展それ自體は一體何に基因してゐるのであらうか。それは云ふまでもなく生産と云ふ行爲様式の根本的な變化に基いてゐる。更にこのやうな變化の根本的原因を追求してゆくと、當然そこには發明と云ふ新らしき行爲様式が見出される。

従つて生産力の發展は社會變動の根本的要因であると云ふよりはむしろ、社會變動それ自體の一の經濟的様相に外ならず、此の立場をつきつめてゆくならば變動の根本的要因は結局發明の中に求められるべきであらう。

發明を以つて社會變動の源泉と見做すものに、上述の如き生産力の發展と云ふ立場からではなく、社會の本質を模倣と見做す見解よりする Tardé がある。^⑪ 彼に依ればすべての社會的變化と進歩との源泉は發明家の個人的天才、その頭腦そのものゝ中に求められなければならないとされてゐる。^⑫ このやうに最初は天才の意識の中に獨創的に發生した發明が模倣に依つて社會現象となるに及んで、社會全體の變化が可能であると云ふことになるの

である。なるほど彼の云ふように社會變動を可能ならしめるやうな偉大なる發明が、所謂劃期的（即ち劃時代的と云へよう）發明が人類に稀なる天才達に依つて成就せられたことは否定し得ざるところであらう。

然らば社會變動の根本的要因はひとりこのやうな天才の獨創的業績である發明にのみ限定されるべきであらうか。若しさうであるならば、眞に稀有の存在とも云ふべきこのやうな天才を有しない多くの社會は永遠に社會變動に遭遇しないこととなるであらう。

確に現存する未開社會が最近まで多く、社會變動に遭遇しなかつたものであらうとの推測はそこに上述の如き天才が現はれなかつたことに依るのであらうが、それは現に未開社會の一部が社會變動を経過しつゝあるのは一體如何なる因素に規定されてゐるためであらうか。又一人の Watt も Newton もなき我が國に於いて明治維新以降の社會變動は何故生起したのであらうか。

社會變動の根本要因を社會の内に於ける個人の發明にのみ認めて、これに限定することから生ずる以上の如き疑問は次に社會の接觸を考察することに依つて略々解決

されるであらう。

社會の接觸とは即ち異質的な行爲様式が接觸交渉することであり、我々は此の點に社會變動の主要なる規定因素を認めるものである。

勿論我々は前述の如きいはゞ劃期的と云ふべき偉大なる發明が社會變動の主要なる規定因素であることは之を認めるのであるが、そのみが唯一の根本的要因であると認めず、むしろそのやうな場合は偉大なる發明をなすやうな天才が稀有である如くに稀有であつて、他の多くの社會變動は根本的に社會の接觸を基因となすものと考へる。^⑩

然し乍ら社會の接觸交渉が行はれ、ば必ずそこに社會の變動がもたらされるとは考へられない。これらの點に關して今少しく詳細に論述してみよう。

社會の接觸 (social contacts)^⑪ とは云ふまでもなく社會の封鎖性 (Abgeschlossenheit) の崩壊を意味するのであるが、それが一時的であるか長期間に亘るか、接觸の領域が部分的であるか全面的であるか、或はそれが親和的であるか鬭争的、對立的であるか等々に依つて種々

なる様相を呈するのであり、従つて社會變動との關係もそれぞれの面から考察せらるべきであるが、今はこれらをすべて他日の機會にゆすり、ここでは特に接觸交渉する兩社會の優劣の差と云ふ見地から社會の接觸と社會變動との關係を検討してみる。

接觸交渉をなす兩社會の優劣の差が殆んど存しないか、もしくは小である場合は何れの社會にも社會變動は生起せず、相互に順應の形態をとる可能性が大である。従つてこのやうな社會の接觸が社會變動の規定因素となる蓋然性は頗る小である。

次に優劣の差が大である場合には劣位の社會の既存の行爲様式は漸次その社會成員への支配力を減退せしめられ、遂に崩壊しさるのであるが、ここに社會變動の過程が見出されるのである。即ち劣位の社會に於ける既存の行爲様式は、はるかに優越せる新たな行爲様式に依つて其の存在の價值、根據を根本的に否定され、或は著しく稀薄化されこれに伴つて社會成員への對應關係も量的及び質的に減少し消滅するに至るのである。

此の場合優位の社會の行爲様式は特に著しい變化を示

さないのが通常であり、従つて社會變動の根本的规定因素として考へられる社會の接觸は優劣の差の大なる社會間に於ける劣位の社會に發動し、影響するものである。

我々はさきに歐洲人のアメリカ大陸への移住が彼等の行爲様式全般を急激に且つ著るしく變改せしめなかつたことを述べたのであるが、此の反面に於いてアメリカ原住民の社會が此の歐洲から移住し來つた先進文明社會と接觸交渉することに依つて如何に大なる社會變動の様相を呈したかは周知のところであらう。

以上の如く優劣の差が小なる時には接觸交渉する相互の社會はそれぞれ其の行爲様式に於いて多少の變容を來たすものであるが、之に反して優劣の差が大なる場合には接觸交渉する一方の社會のみが其の行爲様式に於いて著るしき變革をなし、既存の行爲様式は否定されるのであるが、他の一方の社會は優劣の差が小なる場合の接觸に於ける程の變容をも示さない場合が多いのである。

かくして一定の社會に於ける社會變動の可能性はその社會内の人口の増加、減少にかかはりなく、又その内部に於ける劃期的發明の出現をまつことなく、他の著るし

く優越せる社會との接觸交渉に依つて、乃至そのことの存するかぎりに於いて必然的ならしめられるのである。

然らばこのやうな接觸交渉を通して社會變動の過程は如何に展開するのであるか。次に我々はかかる變動過程の形態そのもの、一面を考察しやう。

四

社會變動の過程は社會の崩壊(social disorganization, Verfall der sozialen Organization)と社會の再建(social reorganization, soziale Umbildung)との二つの形態を包含してゐる。前者は既存の行爲様式の全面的崩壊を意味し、後者は新らしき行爲様式の成立、統合化を意味するのである。^④ 兩者はもとより時間的に前後の關係にあるものではなく、即ち社會の崩壊が完成されて後に社會の再建の第一歩が始まるのではなくして、相共に、相對應して經過し以つて社會變動の全過程を構成してゐるのである。

従つて兩者を截然と分離して考察することは常に一方の考究を豫期しうることに依つてのみ理論的に成立する

と云へよう。我々は今、社會の再建過程の研究を他の機會にまつこととしてこゝでは主として社會崩壊の過程を社會變動の全過程——即ち所謂、過渡期の一面として考察しやう。

前述せる如く社會をして社會たらしめてゐるものは行爲様式であると考へ得るならば、一定の社會の崩壊過程とは其の社會を構成してゐる個々の成員に對して外在する行爲様式の支配力の減退、衰滅の過程である。換言すれば既存の行爲様式が、例へば法律、慣習、道德、制度等々の如きものが個人に對して有するその勢力を全面的に喪失する過程である。逆に云ふならば社會の成員たる個人が既存の行爲様式に配與する度、即ちこれに従ふて行爲する頻度(frequency)の減少、消失の過程に外ならない。

さてこのやうな過程に於いて個人に現はれる行爲様式の衰滅の速度は一般に社會成員の年齢に應じて逆比例する。即ち年少者に於ける程その速度は早く、年長者に至る程、その速度は遅くなる。^⑤ これには主觀的並に客觀的理由が存してゐると云へよう。

さきに考察せし如く社會變動は多くの場合劣弱なる社會が大なる程度に於いて優越せる社會と接觸交渉することに依つて生起するものであるが、前者の成員としての年長者は一般に年少者に比して既存の行爲様式、即ち自己の所屬してゐた劣弱なる社會の從來の行爲様式に對して執着、乃至愛惜の意識を強く、又深く有する可能性が大である。此の場合、勿論年長者と雖も、その極めて特殊なるものを除いて一般に優越せる社會の新たなる行爲様式の優越を認め、更に積極的にはこれを自己の行爲様式となさんとする意欲を有するものであるが、かゝる意識の足手に終始まといつくものは既存の行爲様式への即自的或は對自的なる愛着の情である。これを否定しながらも、或は否定せんとしつつも猶、その否定の極めて困難なる意識である。

云ふまでもなくかかる主觀的意識の基礎には既存の行爲様式に對する年長者の凡そ幼少年以來、久しきに亙る配與、もしくは對應の關係が存し、これに依つて既存の行爲様式が恰も自己の第二の天性の如く固定化してゐるのである。そこには既存の行爲様式の習熟とそれによる

勞少果大の容易さが深く根を下してゐる。

かうした主觀的意識の基礎にあるものは同時に又客觀的理由の基礎たり得る。何となれば此の場合年長者は主觀的には如何に既存の行爲様式を否定し、新しき優越せる行爲様式に同化せんとしても、年少者に比してそれが劣るのはまさにこの基礎にあるものに制約されてゐるからである。即ち既存の行爲様式に依つて所謂成人となつたものは、新しい行爲様式に對して、たとひ後者が著るしく優越せるものであつても、既に獲得し、半ば先天的とまでなつた既存の行爲様式を如何にしても全く、或は徹底的に捨て去ることをなし得ないのである。云はゞ一切の主觀を離れて客觀的に所謂白紙に還ることは不可能である。

このやうな制約が既存の行爲様式の崩壊過程に於いて一の Brake をなすことは云ふまでもない。

翻つて年少者が以上の如き點に於いて年長者に比較して一般に無制約的な立場にあることは明らかであらう。

以上の如く社會崩壊の過程は一般に年長者と年少者との間に異つた様相を呈するものであるが、社會の崩壊過

程を其の一面とする社會變動自體が本來、多くの場合に於いて、優越の大なる社會との接觸に基因するものであるかぎりには、新しく接觸した社會の行爲様式は當然既存の行爲様式よりも大なる程度に於いて優越し、従つて前者は今や價値の低く、少いものとなる。此のやうな状態に於いて年長者と年少者との間に見られる前述の如き立場の相違は必然的に年長者の權威の喪失を加速度的に招來し、凡そ社會の自然的、普遍的な一般的秩序としての年齢に依る年長者の指導と年少者の悦服と云ふ基本的社會關係が全面的面に瓦解し、社會混亂の蓋然性が大となる。

社會崩壞の過程に於けるかうした様相は、經濟、藝術、政治、其の他宗教、教育等々に至るまでの社會の各領域に現はれるが就中、家族なる社會の基本的集團に於いて潜在的にはあるが、即ち外見上は他の社會領域に比して目立たないけれども、最も深刻化することが多い。家族が多くの場合に於いて社會の重要な構成單位をなして居り、主要なる社會集團であると云ふ見地から、このやうな家族の崩壞を社會變動の基本的過程として重要視

し、これを社會崩潰 (social breakdown) と稱するものすらある。⁽¹⁾

社會の崩壞過程に於ける家族の崩壞 (disorganization of the family) は、その主體が單に種々の缺陷を有する家庭——例へば繼親子、養親子或は片親の如き異常なる親子關係やアルコール中毒、種々の遺傳性惡疾、極貧等々の如き缺陷を有する家庭——としての所謂「變則的家庭」(broken home)⁽²⁾であるよりはむしろ、正常なる家庭一般であると云ふ點に特質附けられる。

家族に於ける年長者は一般に兩親であり、年少者は云ふまでもなくその子女である。この兩親對子女の親子關係は權威に依る指導・悦服の關係に於いて家族を統一する根本的社會關係であり、又社會をして社會たらしむる行爲様式の原來的なるものが此の關係に於いて傳承されてゆくのである。

然るにこのやうな社會關係は未知の然かも優越せる行爲様式との交渉に依つて根本的に覆へされる可能性が大である。今や既存の行爲様式に於いて權威を認められてゐた兩親は逆に新しき優越せる行爲様式への同化の過程

に於いてその子女に權威を認めなければならぬことが多くなる。このことは子女の側から云へば兩親の無能、頑迷固陋となり易く、權威を失墜した兩親への反抗、反逆が正當化されることとなる。ここに極端なる利己主義としての個人主義が擡頭し、個人的破綻 (individual dis-organization) が或る程度、不可避免となるのである。前者は青少年層の犯罪、不良化となつて現はれ、後者は老壯年層の自殺等の現象に其の極端なる形態を見うるのである。

五

以上極めて簡単に、又抽象的、形式的に社會變動の一面をなす社會崩壞の過程を論述し、このことに依つて過渡期に於ける社會的形相の片鱗を窺つたのである。

わが國家、民族の現實の姿がこのやうな意味に於いて正しく過渡期として把握さるべきであるか否かは、換言すれば新しき社會、新しき時代への變遷過程であるか否かは世界史の流れに於いて究極的に決定さるべきものであり、又それ以外の方途はないと考へられる。

遮莫、古き社會、既存の行爲様式が如何なるものであつたかは敗戦と云ふ大いなる否定を通して我々の切實に體認したところであり、自覺したところである。否現にさうしつゝあるところであり、又そのようであるべきはずである。その行爲様式が急速度に崩壞しつゝあることも現實に認められるところであらう。又その崩壞の速度に於いて年長者と年少者との間に存する差異も相當明確に認められる。年長者に依つて常識的と考へられてゐる事柄が、今や年少者にとつては容易に理解し難き所となり、他面、年少者の行爲は舊來の常識を未だ相當所有してゐる年長者に依つて不可解のものとされてゐる。

年長者の有してゐた權威は急速度に失墜し或るものは否定されゆく自己の第二の天性と共に、自然の攝理をまたずして自らの肉體を破滅させつゝある。年少者は又、權威なき社會に於いて獨力で自己の進路を決定せんとして、一切の權威の否定されたる原始人的な世界に彷徨してゐる。彼等の犯罪は増加し、不良化の傾向は急激に高まりつゝある。

この現實の相を一言にして云へば典型的に近い社會崩

壞の過程である。

社會變動をこのやうに社會崩壞の半面からのみ觀察すれば社會的悲觀主義 (social pessimism) に陥らざるを得ない。然し乍ら社會變動はこのやうな社會崩壞の過程を只その半面としてゐるにすぎない。そこには社會再建の過程が猶存してゐることを忘れてはならない。

本來、社會變動は上述せし如く其の多くの場合に於いて優越せる社會との新たな接觸交渉に依つて生起するところであり、従つてその一面をなす社會崩壞の過程もそれ自體、その出發點に於いて新たな行爲様式、優越せる文化との接觸を前提としてゐることが多い。而して社會成員の此の新たな行爲様式への同化の過程が社會再建の基調をなし、そこから新たな社會、新たな時代への胎動がはじまり、陣痛が起るのである。

この social pessimism と social optimism との辯證法的統一を夢見ることは許されなうであらうか。

(註 二三、六、二四)

註①É. Durkheim, *Les Règles de la Méthode sociologique*, 7^e éd. 1919, pp. 1-19.

②É. Durkheim, *ibid.* p. 16.

彼は又「思惟、感情、行動の様式 (manières de penser, de sentir, et de se conduire) を決定する。」(ibid. p. 6)

③米國の文化社會學、文化人類學に於いてこのやうな行爲様式は人間生活の様態 (mode of human life) 或は行動の雛型 (behavior pattern) と呼ばれ、これを所謂精神文化も物質文化をも包括した廣い意味の文化と定義する。(cf. C. Wissler, *Man and Culture*, 1922, W. F. Ogburn, *Social Change*, 1922. A. L. Kroeber, *Anthropology*, 1923.)

④J. J. Rousseau, *Essai sur l'origine des langues. Oeuvres complètes* (Hachette, 1905), Tome I, p. 370. 田邊壽利「言語社會學敍説」三頁

⑤cf. C. Wissler, *An Introduction to Social Anthropology*, 1929

⑥文化と社會との關係に就いては松本潤一郎博士「社會學論及學說」第三章「文化社會學に於ける社會概念」參照。
⑦白井二尚博士「社會と個人」社會圈第二卷第二號參照。

⑧Vgl. F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, 1821. L. v. Stein, *Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich von 1789 bis auf unsere Tage*, 1850

⑨cf. R. M. MacIver, *Community*, 1928, pp. 23.

- ③cf. M. Ginsberg, *Sociology*. 1934. p. 43. pp. 159-195
- ④G. Simmel, *Soziologie*. 2 Aufl. 1922. s. 31.
- ⑤cf. R. M. MacIver, *ibid.*
- ⑥H. Spencer の社會進化論を E. Durkheim の社會形態學、或は我が高田博士の第三史觀、小松堅太郎氏の見解等々其の他多くの學説がある。
- ⑦周知の如く唯物史觀は最も明確に此の立場をとつてゐると云ふよう。即ち社會の物質的生産力が社會の基礎であり、従つて其の發展が社會變革の根本的動因であるとなつてゐる。Vgl. N. Buharin, *Theorie des historischen Materialismus*. 1922.
- ⑧G. Tarde, *Les Lois sociales, Esquisse d'une Sociologie*. 1921.
- ⑨G. Tarde, *ibid.* 松本潤一郎氏「現代社會學說研究」一五四頁
- ⑩發明自體も社會の接觸交渉と云ふ事實に依つて可能となる場合が多い。此のことはタルド自身も個人的發明が二つ以上の模倣的内容の獨創的個人の頭腦を俟つて結びつく所産であるとし、發明は模倣の波の幸福なる結婚であるとしてゐることに依つても窺はれるであらう。(G. Tarde, *ibid.* ch. III.) 又ウエルスは十六世紀以降、西歐に於ける自然科學分野の諸々の偉大なる發明がアダムや其の他の地域との接觸交通に影響され、依存してゐたことを述べてゐる。(H. G. Wells, *A short History of the World*. p. 23)
- 又、このことは逆に個人的天才と發明とが必ずしも一致せず、多くの個人的天才はあれども之に伴つて發明が成立し得ないことに依つても明らかであらう。(A. Gold-enweiser, *Early Civilization*. 1922. pp. 18-19)
- ⑪cf. R. E. Park and E. W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology*. pp. 280-338
- ⑫cf. E. A. Ross, *Principles of Sociology*. 1923. pp. 5 25-554 彼は社會變動 (Social change) を社會變化 (social transformation) と社會再構成 (social reshaping) とに分けて、前者を發生した (happend) もの、後者を意欲された (willed) ものとしてゐるが、この二つの社會の崩壊と再建の過程に略々該當する。
- ⑬ここに「外在する」と云ふのは Durkheim の云ふが如き、行爲様式が全く個人と獨立して、個人にかかわりなく外在すると云ふ實體的な意味ではなく、それが個人に即しつつも、猶ほ且つ、一般にそれが或る特定の個人に依つて創り出されたものでも、又特定の個人が專有してゐるものでもなく、個人の生前から存し、個々人の死後も猶ほ亡びざらなうと云ふ意味に於いて超個人的であると云ふ意味である。
- ⑭cf. W. I. Thomas and F. Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*. vol. 2. 1927. pp. 1127-1132

②此の意味に於いて老人はオグバインの所謂「文化的遅滞」(Cultural Lag)の年齢層とも云ふことが出来る。

(cf. W. F. Ogburn, Social Change, 1922)

③移民の場合、一世と二世との間にこの典型的な形態が見られる。

④B. Buell and R. Robinson, "A composite Rate of social Breakdown," The American Journal of Sociology, vol. XLV, No. 6, 1940, pp. 887-889

⑤cf. E. H. Sutherland, Principles of Criminology, 1934, pp. 139-155.

(二三頁より續き) 轉爲將來世々讚佛乘之因轉法輪之緣也、十方三世諸佛應知云云」といつてゐるのである。垂老の詩人歸佛の情の切なること以て見るべきであるとともに、この語はまことに宗教者の文學の庶幾するところをよく語つてゐるといふことができる。それ故平安時代以來我朝野においてこの語はつねに愛用され、中世に於ける文學精神を云ひあらはす語として屢々用ゐられてゐるものであり、俊成の「古來風體抄」などにも用ゐられ、謡曲にも所々にあらはれてゐる。上人の場合は恐らく朗詠によつてこれを知りこれを援用せられたものであらうと思はれる。

鈴木大拙	淨土系思想論	價三五〇
望月信亨	佛教經典成立史論	價二八〇
望月信亨	大乘起信論	近刊
山田文昭	親鸞とその教團	價一二〇
家永三郎	親鸞聖人行實	價九〇
稻葉昌丸	蓮如上人行實	價三五〇
稻葉昌丸	蓮如上人遺文	價五八〇

漢藏辭典

プリント版・價一三〇

西藏文法要論

プリント版・近刊

鈴木大拙

英文佛教の大意

價一二〇 下二〇

館藏法

東京市下區正面向丸東